

師走の声を聞いた途端、冬らしい寒さとなりました。今年も残すところわずかとなりましたが、本日もこのHPを訪れていただき感謝申し上げます。

街路樹のナンキンハゼの緑色の実が黒くなり、その固い殻がはげて、中の白い種が顔を出しています。古来、和ろうそくを作るのにこのハゼの種子が使われていたということですが、人には毒らしいこの種子も、カラスやスズメには脂肪分に富んだ絶好の食物らしく、朝から木に群がっています。もうすぐ、もっと寒くなって葉がみんな落ちて、白い種子だけになるようです。

新型コロナがまたも蔓延しつつあります。当院でも、10月から行っていた院内立ち入り緩和策を再度強化することになりました（詳細は、「お知らせ」をご覧ください）。院内の複数病棟でクラスターも発生し、入院患者様や入院・手術の予定患者様、そして地域の医療機関の皆様大変なご迷惑とご不安を与えており、深くお詫び申し上げます。引き続き、感染防御の徹底と、診療機能の復旧・維持に最善を尽くしたいと存じます。

ずっと良いことが一つもないこの日本で、最近、サッカーチームが、感動と歓喜の嵐を巻き起こし、マスコミの力も借りて、その暖かさで日本国中を包んでくれたように感じます。みんなで同じ方向をむき、困難なことに立ち向かい、それが達成されたときの歓喜を分かち合う、得た悔しさは将来の糧にする、という組織運営の極意を見せられた感じがしました。熊本労災病院には、700人余りの職員がいますが、職員みんなに病院の向かうところを伝え、そのための課題を共有して解決策を自ら考え、それをさらにみんなで共有して目的を達成する、そんな道をわたしたちは辿ろうとしています。ただ、この職員数での情報共有は簡単ではありません。今や、一斉メールを送るという手段は企業などでは一般的ですが、日本全体の傾向と同様に、デジタル社会になじめない、なじみたくない、という職員も少なからずいて、「紙」に頼る部分も大きいです。当院では、「ばんぺいゆ」という院内誌を月に1回刊行しており、この12月号で通算422号になっています。事務職員による、文字通りの手作り感満載の冊子ですが、内容がだんだん充実して読み応えのあるものになっていて、多くの職員が目にしていきます。たくさん印刷されて各部署に配付されますが、しかし、読まなければそれまでです。特に重要な、伝達すべき情報は、選別した上で繰り返し複数の伝達手段に頼る、しかないとも感じます。これは、緊急時の情報伝達にも言えることです。最近、災害訓練で、病院への参集メールを出してその応答率をみると7割程度でした。当然、何か災害の予兆や実際の発生があればもっと反応率は高いと思いますが、予告無しの訓練を通じて実効性を高める必要があります。災害拠点病院として、各職員の認識を高め、また伝達ツールの確保を徹底していきたいと思っております。

今年、「年賀状を廃止します」というお知らせが、例年になく病院にたくさん届きます。自宅にも数通もらいました。SDGsの一環でもあると謳うところが多いように思います。組織間での儀礼廃止の意味は認めたくなくて、個人的には、少なくとも個人間の年賀状のやり取りは、「私は生きていますよ、あなたも元気そうでよかったです」、という相互の確認意義が大きいと思っています。私は2000年に熊本大学の小児外科・移植外科という科に着任しましたが、その後数年の間に肝移植などの手術を受けたお子さんたちが、最近、進学や就職など人生の方向性を決める時期に至っています。年賀状は、その成長過程を知る大きなよすがとなってきました。最近話を聞くと、多くの子が、看護師、薬剤師、臨床工学技士、管理栄養士、など多彩な医療関係職種を選ぼうとしてくれていて、みんな長い間自分の体に向き合いながら、関与してきた医療者の姿をみて夢を膨らませてきたことが感じられ、とてもうれしく思っています。年賀状で、たとえ長期間会っていないその子らが夢の一步を踏み出したことを、また大人でも治療を受けたあとのその時々近況を、伝えてくれるのではないかと、やはり年賀状は楽しみです。

私は1953年産まれで来年は70歳、熊本労災病院とちょうど同い年です。私自身はこれだけ生かしてもらって好きなこともさせていただいて人生のまとめを考える時期ですが、労災病院はこれからますます元気になって地域のみなさまに期待され活躍する存在であり続けねばなりません。未来を見据えながら、コロナ禍も続く足下の診療をしっかりと地道に遂行していくように、年末年始の時期、職員のみなさんと思いを新たにしたいと思います。本年の皆様のご指導ご支援、ほんとうにありがとうございました。来年もどうぞよろしく願いいたします。